

《評論連載》

絵本論を探して

女の子はおつかいに行く(第五回)

灰島 かり

女の子の冒険

現代では当然のことながら、女の子の冒険を描いた絵本はたくさん出ている。こう書いてまちがいは無いのだが、目がどうしても宙を泳いでしまう。なぜなら女の子の冒険を描いた絵本は、その冒険の質が男の子とはずいぶん異なっているからだ。おそらく一番多い「女の子の冒険絵本」は、女の子の日常生活を描いたものだろう。この分野の絵本は、その魅力の大半を主人公のキャラクターの魅力に負っている。そのためタイトルがストリートに女の子の名前であることが多く、また成功した絵本はシリーズ化されやすい。その代表が、『げんきなマドレーヌ』(図1)から始まるマドレーヌのシリーズだろう。マドレーヌは一冊ごとに、盲腸になったり、セーヌ川に落ちて犬に助けられたり、サーカス団に入ったりする。日常生活にはおもしろくない危険もあり、もちろん冒険もあるのだが、マドレーヌには解決すべき課題があるわけではない。この絵本の魅力

の中心は、マドレーヌとその背景であるパリを見せることであって、マドレーヌは森へ行くことはない。  
ほかに『マドレンカ』、『オリビア』、『あたしくラリス・ビーン』(注1)、日本のものだと少しニュアンスが違うが『おやすみなさいココロさん』(注2)にはじまるココロさんのシリーズを入れてもいいかもしれない。この手の絵本についても考察したいが、今回は省略して「森へ行く」絵本にこだわることしよう。



(図1) 『げんきなマドレーヌ』  
福音館書店 表紙)